

Title	磁州窯の白磁像：圖版解説
Author(s)	みづの, せいいち
Citation	東洋史研究 (1947), 9(5-6): 228-228
Issue Date	1947-08-15
URL	http://dx.doi.org/10.14989/145838
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

磁州窯の白磁像

— 圖版解説 —

磁州窯の歴史はながい、しかし、それは徹頭徹尾民間の窯であつた。政府から特別な保護をうけず、宮廷のために特別な器をつくらなかつた。それは民間の大衆によつて支持され、さかんになつた窯であつた。それは官に對する民、貴族に對する庶民を意味するもので、決して新興ブルジョアジーを除外するものではなかつた。磁州窯の繁榮はつまり、都市生活の發達に照應する現象といへよう。

だから磁州窯における製作は多量生産であつた。機械力には依存せず、やはり手足の工作であつたけれども、おなじものを、短時間に多量につくらうとしたから、製品は劃一的であつた。すなはち、この點では、もはや、利潤をおふ商品でしかなかつた。しかし、一方にはこれを使用する大衆の趣味、生活をはなれては、やはり商品としても成立しない、それらが庶民的な趣味をたゞへてゐることも當然であり、それにまた一方、つくる組織にも、つくる人々にも新興庶民的なところがあり、それが磁州窯を健全な發達にみちびいた。

こゝにあげた二例は、宋の時代にかれらがつくつた人形である。うへはすまふ、したは大きな角をもつ牛であるが、その生々とした、のびのびとした表現をみられたい。もはや貴族趣味のとりすましたものはどこにもみられない。人間の、動物の生命がちかにせまつてくるよろこびを、われわれは感ずる。實にしたしむべき愛くるしい存在である。

しかし磁州窯も、ちかごろのものはちがつてゐる。それは表現がへたであるとか、材料がわるいといふやうなことをとほりこして、かちかちにかたくなつてゐる、もはや藝術品でないから、劣悪な材料がむきむきと表面にでゐる、それをどうすることもできない、しようとしもない。露骨になつた資本主義のもとで職人たちはあへいでゐる。つくるよろこびよりも、生きるくるしみをつくづくとあじはつてゐる。これではいゝものができようはずはない。二つとも西宮のみづのこうのすけ氏の蒐集品である。

(みづのせうこう)